

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12716

研究課題名(和文) 宋元代の説文以外小学書と金石学文献の篆文字形データベース

研究課題名(英文) The Seal Glyph Database for the Non-Shuowen Etymology Studies in the Sung-Yuan Dynasties

研究代表者

鈴木 俊哉 (suzuki, shunya)

広島大学・情報メディア教育研究センター・助教

研究者番号：70311545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：宋元代に広く行われた復古編類のうち、復古編・増修復古編・續復古編の篆文字形を切り出し、宋本説文解字および宋本五音韻譜との字形対照表を作成した。また、北宋成立した考古圖の積字資料である考古圖釋文の篆文字形を切り出し、隸定字、反切、器物名をデジタルテキスト化した。また、字形集合として説文を想定していた小篆検索ツールを改修し、説文以外の字形集合に対応させた。これらによって復古編類の篆文字形の正誤規準を統計的に調査すると、石刻資料の影響は散発的に見えるが、何らかの説文旧本や青銅器に見える字形を規範とするものではなく、大徐本の説解に見える六書に基づいて大徐本の小篆字形を改めたものであることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

秦石刻に見える小篆字形と説文解字に見える小篆字形が異なることは既に唐代に認識され、これを修正する改訂も行われていたと思われるが、大徐本成立によって説文学の上ではその改訂の多くは排除された。宋元代の金石学者は先秦の古漢字字形と説文に見える小篆の違いは認識していたと思われるが、復古編類の正誤規準を見る限り、説文に基づいた文字学は金文研究の知見を加える方向には進まず、むしろ大徐本が伝える六書を優先して説文に見える小篆字形までも相対化する方向の文字学が分岐したように思われる。また字形の揺れの調査の副次的成果として、行款が全く異なる宋刊大徐本と宋刊五音韻譜の祖本が共有されている可能性が見つかった。

研究成果の概要(英文)：The Seal glyphs collected from Fugubian, Zengxiu Fugubian, Xu Fugubian are collected and digitized as the glyph comparison table with Shuowen. Also, the Seal glyphs in Kaogutu-Shiwen are digitized, and their source object names, fangqie are added. Our Seal searching tool was originally designed for the glyph collection of Shuowen, and it was improved to support non-Shuowen glyph collection. By the investigation with these databases and tools, it was found that the "correctness" of the Seal glyphs in Fugubian are not tweaked by the earlier versions of Shuowen or any excavated Bronze objects, but modified to fit the etymological description written in the DaXu version.

It is supposed that the Shuowen studies in the Sung dynasty did not attempt to unify the archaeological etymologies, and the glyphs in the excavated materials are used as the supplemental resource to append the variant glyphs.

研究分野：人文情報学

キーワード：復古編 小篆

1. 研究開始当初の背景

現在通行の説文解字は北宋初期に勅命によって徐鉉が編んだ、いわゆる「大徐本」の系列である。唐代においては「李陽冰刊訂説文」が広く使われていたと考えられている。李陽冰は、それ以前の説文が示す小篆字形が秦石刻資料に見える字形と異なることを問題視し、石刻資料の篆文と説文字形が整合するように例示字形を改め、さらに説解の六書が字形をうまく説明できない場合は説解までも改めたことが徐鍇の『説文解字繫傳』から読み取れる。徐鍇・徐鉉はこの改訂に批判的であり、現在通行のテキストは二徐が改訂以前の姿に戻したものと考えられている。大徐本は勅命によって編まれたものであるから、大徐本成立以降の篆文は大徐本に従うように思われるが、宋元代の小学書には大徐本に従わない篆文もしばしば見える。さらに、清代の四庫全書所収の徐鍇『説文解字繫傳』の写本の中には、二徐の字形とはかなり異なるものが混ざる。特に、「魚」の字形はほぼ全て二徐の字形と異なり、大徐本が史籀字形とするものになっている(鈴木 2019)。

2. 研究の目的

大徐本が成立しても、必ずしも全ての篆文が大徐本に従うよう収斂したわけではなく、大徐本と異なる字形も(金石資料の単なる模写としてではなく)何等かの経路で流通したものである。そこで、宋元代の説文以外の小学書に見える篆文字形をデータベース化し、大徐本との差異を調べ、差異の起源が宋代の金石学を踏まえたものかを検討することが本課題の目的であった。

3. 研究の方法

説文以外小学書としては、北宋の張有による『復古編』、またその元代の増補本である『増修復古編』『續復古編』をとり、この篆文字形をデータベース化して大徐本および説文解字五音韻譜の小篆字形と比較する。復古編は収字数が 2000 項未満のもので説文の代替にはならないが、宋代の篆刻理論書『學古編』は篆刻の参考書として説文と並んで挙げている。この理由は、説文は大量の正しい字形を個別に示すが正誤規準は示さないで、字形の揺れの正誤判断に用いることが難しかったが、復古編には字様書的な附録を持ち正誤判断に有用だった点と思われる。そこで、復古編類が掲出する篆文のうち大徐本と差異があるものについて、当時の金石学の知見に起源を求められるかを検討した。金石学の資料としては汗簡や古文四聲韻のような典拠の追跡が難しい伝抄古文を含まず、典拠が追跡可能と思われるものとして『考古圖釋文』を用いた。

4. 研究成果

実施開始当初は復古編類と金石学文献の関連を推定していたが、調査が進むに従い、復古編類の字体は説文旧本や金石学の篆文字形に単純に従ったとは考え難いことが明らかとなり、復古編類内部での字形・字体意識の分析に重点を置いた。

4.1. 制作したデータベース

復古編類内部の字形の揺れを確認するため、データベースは字形対照表として制作した。また、代表者が既に制作していた小篆の検索ツールは UCS 現代漢字への対応付けによって検索するが、楷書字形が別符号化されているもの(例えば長・長や歩・歩など)を統合検索できるように正規化の仕組みを加え、さらに検索結果のレイアウトを維持しながら底本を変更できるように改修し、対照作業の効率化を図った(鈴木 2021c)。

FGB-0005	影宋: 卷01.001b.g04 元刊: 卷01.001a.g05	𧈧	𧈨	𧈩	𧈪	𧈫	𧈬	𧈭	桐
FGB-0006	影宋: 卷01.001b.g05 元刊: 卷01.001a.g06	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙	蒙
FGB-0007	影宋: 卷01.001b.g06 元刊: 卷01.001b.g01	濛	濛	濛	濛	濛	濛	濛	濛
FGB-0008	影宋: 卷01.002a.g01 元刊: 卷01.001b.g02	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜
FGB-0009	影宋: 卷01.002a.g02 元刊: 卷01.001b.g03	𧈮	𧈯	𧈰	𧈱	𧈲	𧈳	𧈴	忽/恩

復古編諸版小篆字形対照表(一部)

KGT-SW-011	文淵: 葉04右.g11 十萬: 葉06.g11	𧈧	𧈨	𧈩	𧈪	𧈫	𧈬	𧈭	熊/胡弓反//距中国/説文作𧈧小異
KGT-SW-012	文淵: 葉04左.g01 十萬: 葉06.g12	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐/數馮反//單發義/古文作𧈮
KGT-SW-013	文淵: 葉04左.g02 十萬: 葉06.g13	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐//交鼎義/𧈮亦古豆字
KGT-SW-014	文淵: 葉04左.g03 十萬: 葉06.g14	公	公	公	公	公	公	公	公/古紅反//公臧鼎/説文作𧈯
KGT-SW-015	文淵: 葉04左.g04 十萬: 葉06.g15	𧈮	𧈯	𧈰	𧈱	𧈲	𧈳	𧈴	通/它紅反//號姜敦

考古圖釋文模写字形一覽(一部)

		海	宋五	復宋	復元	續修																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
ZX-FGB-0001	海: 卷08上.01a.g02 復宋: 卷01.001a.g01 續修: 卷1.01a.g01	𧈮	𧈯	𧈰	𧈱	𧈲	𧈳	𧈴	𧈵	𧈶	𧈷	𧈸	𧈹	𧈺	𧈻	𧈼	𧈽	𧈾	𧈿	𧉀	𧉁	𧉂	𧉃	𧉄	𧉅	𧉆	𧉇	𧉈	𧉉	𧉊	𧉋	𧉌	𧉍	𧉎	𧉏	𧉐	𧉑	𧉒	𧉓	𧉔	𧉕	𧉖	𧉗	𧉘	𧉙	𧉚	𧉛	𧉜	𧉝	𧉞	𧉟	𧉠	𧉡	𧉢	𧉣	𧉤	𧉥	𧉦	𧉧	𧉨	𧉩	𧉪	𧉫	𧉬	𧉭	𧉮	𧉯	𧉰	𧉱	𧉲	𧉳	𧉴	𧉵	𧉶	𧉷	𧉸	𧉹	𧉺	𧉻	𧉼	𧉽	𧉾	𧉿	𧊀	𧊁	𧊂	𧊃	𧊄	𧊅	𧊆	𧊇	𧊈	𧊉	𧊊	𧊋	𧊌	𧊍	𧊎	𧊏	𧊐	𧊑	𧊒	𧊓	𧊔	𧊕	𧊖	𧊗	𧊘	𧊙	𧊚	𧊛	𧊜	𧊝	𧊞	𧊟	𧊠	𧊡	𧊢	𧊣	𧊤	𧊥	𧊦	𧊧	𧊨	𧊩	𧊪	𧊫	𧊬	𧊭	𧊮	𧊯	𧊰	𧊱	𧊲	𧊳	𧊴	𧊵	𧊶	𧊷	𧊸	𧊹	𧊺	𧊻	𧊼	𧊽	𧊾	𧊿	𧋀	𧋁	𧋂	𧋃	𧋄	𧋅	𧋆	𧋇	𧋈	𧋉	𧋊	𧋋	𧋌	𧋍	𧋎	𧋏	𧋐	𧋑	𧋒	𧋓	𧋔	𧋕	𧋖	𧋗	𧋘	𧋙	𧋚	𧋛	𧋜	𧋝	𧋞	𧋟	𧋠	𧋡	𧋢	𧋣	𧋤	𧋥	𧋦	𧋧	𧋨	𧋩	𧋪	𧋫	𧋬	𧋭	𧋮	𧋯	𧋰	𧋱	𧋲	𧋳	𧋴	𧋵	𧋶	𧋷	𧋸	𧋹	𧋺	𧋻	𧋼	𧋽	𧋾	𧋿	𧌀	𧌁	𧌂	𧌃	𧌄	𧌅	𧌆	𧌇	𧌈	𧌉	𧌊	𧌋	𧌌	𧌍	𧌎	𧌏	𧌐	𧌑	𧌒	𧌓	𧌔	𧌕	𧌖	𧌗	𧌘	𧌙	𧌚	𧌛	𧌜	𧌝	𧌞	𧌟	𧌠	𧌡	𧌢	𧌣	𧌤	𧌥	𧌦	𧌧	𧌨	𧌩	𧌪	𧌫	𧌬	𧌭	𧌮	𧌯	𧌰	𧌱	𧌲	𧌳	𧌴	𧌵	𧌶	𧌷	𧌸	𧌹	𧌺	𧌻	𧌼	𧌽	𧌾	𧌿	𧍀	𧍁	𧍂	𧍃	𧍄	𧍅	𧍆	𧍇	𧍈	𧍉	𧍊	𧍋	𧍌	𧍍	𧍎	𧍏	𧍐	𧍑	𧍒	𧍓	𧍔	𧍕	𧍖	𧍗	𧍘	𧍙	𧍚	𧍛	𧍜	𧍝	𧍞	𧍟	𧍠	𧍡	𧍢	𧍣	𧍤	𧍥	𧍦	𧍧	𧍨	𧍩	𧍪	𧍫	𧍬	𧍭	𧍮	𧍯	𧍰	𧍱	𧍲	𧍳	𧍴	𧍵	𧍶	𧍷	𧍸	𧍹	𧍺	𧍻	𧍼	𧍽	𧍾	𧍿	𧎀	𧎁	𧎂	𧎃	𧎄	𧎅	𧎆	𧎇	𧎈	𧎉	𧎊	𧎋	𧎌	𧎍	𧎎	𧎏	𧎐	𧎑	𧎒	𧎓	𧎔	𧎕	𧎖	𧎗	𧎘	𧎙	𧎚	𧎛	𧎜	𧎝	𧎞	𧎟	𧎠	𧎡	𧎢	𧎣	𧎤	𧎥	𧎦	𧎧	𧎨	𧎩	𧎪	𧎫	𧎬	𧎭	𧎮	𧎯	𧎰	𧎱	𧎲	𧎳	𧎴	𧎵	𧎶	𧎷	𧎸	𧎹	𧎺	𧎻	𧎼	𧎽	𧎾	𧎿	𧏀	𧏁	𧏂	𧏃	𧏄	𧏅	𧏆	𧏇	𧏈	𧏉	𧏊	𧏋	𧏌	𧏍	𧏎	𧏏	𧏐	𧏑	𧏒	𧏓	𧏔	𧏕	𧏖	𧏗	𧏘	𧏙	𧏚	𧏛	𧏜	𧏝	𧏞	𧏟	𧏠	𧏡	𧏢	𧏣	𧏤	𧏥	𧏦	𧏧	𧏨	𧏩	𧏪	𧏫	𧏬	𧏭	𧏮	𧏯	𧏰	𧏱	𧏲	𧏳	𧏴	𧏵	𧏶	𧏷	𧏸	𧏹	𧏺	𧏻	𧏼	𧏽	𧏾	𧏿	𧐀	𧐁	𧐂	𧐃	𧐄	𧐅	𧐆	𧐇	𧐈	𧐉	𧐊	𧐋	𧐌	𧐍	𧐎	𧐏	𧐐	𧐑	𧐒	𧐓	𧐔	𧐕	𧐖	𧐗	𧐘	𧐙	𧐚	𧐛	𧐜	𧐝	𧐞	𧐟	𧐠	𧐡	𧐢	𧐣	𧐤	𧐥	𧐦	𧐧	𧐨	𧐩	𧐪	𧐫	𧐬	𧐭	𧐮	𧐯	𧐰	𧐱	𧐲	𧐳	𧐴	𧐵	𧐶	𧐷	𧐸	𧐹	𧐺	𧐻	𧐼	𧐽	𧐾	𧐿	𧑀	𧑁	𧑂	𧑃	𧑄	𧑅	𧑆	𧑇	𧑈	𧑉	𧑊	𧑋	𧑌	𧑍	𧑎	𧑏	𧑐	𧑑	𧑒	𧑓	𧑔	𧑕	𧑖	𧑗	𧑘	𧑙	𧑚	𧑛	𧑜	𧑝	𧑞	𧑟	𧑠	𧑡	𧑢	𧑣	𧑤	𧑥	𧑦	𧑧	𧑨	𧑩	𧑪	𧑫	𧑬	𧑭	𧑮	𧑯	𧑰	𧑱	𧑲	𧑳	𧑴	𧑵	𧑶	𧑷	𧑸	𧑹	𧑺	𧑻	𧑼	𧑽	𧑾	𧑿	𧒀	𧒁	𧒂	𧒃	𧒄	𧒅	𧒆	𧒇	𧒈	𧒉	𧒊	𧒋	𧒌	𧒍	𧒎	𧒏	𧒐	𧒑	𧒒	𧒓	𧒔	𧒕	𧒖	𧒗	𧒘	𧒙	𧒚	𧒛	𧒜	𧒝	𧒞	𧒟	𧒠	𧒡	𧒢	𧒣	𧒤	𧒥	𧒦	𧒧	𧒨	𧒩	𧒪	𧒫	𧒬	𧒭	𧒮	𧒯	𧒰	𧒱	𧒲	𧒳	𧒴	𧒵	𧒶	𧒷	𧒸	𧒹	𧒺	𧒻	𧒼	𧒽	𧒾	𧒿	𧓀	𧓁	𧓂	𧓃	𧓄	𧓅	𧓆	𧓇	𧓈	𧓉	𧓊	𧓋	𧓌	𧓍	𧓎	𧓏	𧓐	𧓑	𧓒	𧓓	𧓔	𧓕	𧓖	𧓗	𧓘	𧓙	𧓚	𧓛	𧓜	𧓝	𧓞	𧓟	𧓠	𧓡	𧓢	𧓣	𧓤	𧓥	𧓦	𧓧	𧓨	𧓩	𧓪	𧓫	𧓬	𧓭	𧓮	𧓯	𧓰	𧓱	𧓲	𧓳	𧓴	𧓵	𧓶	𧓷	𧓸	𧓹	𧓺	𧓻	𧓼	𧓽	𧓾	𧓿	𧔀	𧔁	𧔂	𧔃	𧔄	𧔅	𧔆	𧔇	𧔈	𧔉	𧔊	𧔋	𧔌	𧔍	𧔎	𧔏	𧔐	𧔑	𧔒	𧔓	𧔔	𧔕	𧔖	𧔗	𧔘	𧔙	𧔚	𧔛	𧔜	𧔝	𧔞	𧔟	𧔠	𧔡	𧔢	𧔣	𧔤	𧔥	𧔦	𧔧	𧔨	𧔩	𧔪	𧔫	𧔬	𧔭	𧔮	𧔯	𧔰	𧔱	𧔲	𧔳	𧔴	𧔵	𧔶	𧔷	𧔸	𧔹	𧔺	𧔻	𧔼	𧔽	𧔾	𧔿	𧕀	𧕁	𧕂	𧕃	𧕄	𧕅	𧕆	𧕇	𧕈	𧕉	𧕊	𧕋	𧕌	𧕍	𧕎	𧕏	𧕐	𧕑	𧕒	𧕓	𧕔	𧕕	𧕖	𧕗	𧕘	𧕙	𧕚	𧕛	𧕜	𧕝	𧕞	𧕟	𧕠	𧕡	𧕢	𧕣	𧕤	𧕥	𧕦	𧕧	𧕨	𧕩	𧕪	𧕫	𧕬	𧕭	𧕮	𧕯	𧕰	𧕱	𧕲	𧕳	𧕴	𧕵	𧕶	𧕷	𧕸	𧕹	𧕺	𧕻	𧕼	𧕽	𧕾	𧕿	𧖀	𧖁	𧖂	𧖃	𧖄	𧖅	𧖆	𧖇	𧖈	𧖉	𧖊	𧖋	𧖌	𧖍	𧖎	𧖏	𧖐	𧖑	𧖒	𧖓	𧖔	𧖕	𧖖	𧖗	𧖘	𧖙	𧖚	𧖛	𧖜	𧖝	𧖞	𧖟	𧖠	𧖡	𧖢	𧖣	𧖤	𧖥	𧖦	𧖧	𧖨	𧖩	𧖪	𧖫	𧖬	𧖭	𧖮	𧖯	𧖰	𧖱	𧖲	𧖳	𧖴	𧖵	𧖶	𧖷	𧖸	𧖹	𧖺	𧖻	𧖼	𧖽	𧖾	𧖿	𧗀	𧗁	𧗂	𧗃	𧗄	𧗅	𧗆	𧗇	𧗈	𧗉	𧗊	𧗋	𧗌	𧗍	𧗎	𧗏	𧗐	𧗑	𧗒	𧗓	𧗔	𧗕	𧗖	𧗗	𧗘	𧗙	𧗚	𧗛	𧗜	𧗝	𧗞	𧗟	𧗠	𧗡	

4.2. 復古編の小篆字形データベース

『復古編』に関しては邱永祺 2011、王珏 2020 の先行研究があり、その中で版本評価も為されている。邱永祺 2011 は大徐本と復古編の篆文字形対照表を含み、また王珏 2020 では復古編の篆文字形について大徐本との比較校正を行っている。両先行研究とも版本評価においては収字数が 1 字(占)多い好古齋元刊本(中華再造善本所収)がより古い姿であると推測する。ただし、これらの対照表・校正リストは四庫叢刊三編所収の黃丕烈旧蔵影宋写本(南宋刊王佐才本に基づく)とされる)を用い、「影宋写本の字形に問題がある場合には元刊本によって補正するが、影宋写本の字形に問題がなければ元刊本の状況は述べない」という方針であり、元刊本の状況はあまり明らかでない。そこで、本課題においてはまず影宋写本・元刊本の篆文字形をすべて切り出してデータベース化した。また、四庫全書(文淵閣本・文津閣本)からも篆文字形を採った。影印出版が行われていない明刊本の写本 2 点についても追加した(鈴木 2021b, 2021c, 2021d)。

4.2.1. 復古編の版本評価

復古編のうち、影宋写本は図形部品「長」「魚」「金」などの字形が大徐本と異なる形に統一されていることが目立つ。先行研究では元刊本での状況が詳述されていなかったが、本研究で確認した結果、元刊本ではこのうち「魚」は大徐本字形に揃えられていることが分かった。元刊本から写されたことが確実な写本は現在知られていない。邱永祺 2011 では、影宋写本が持つ王佐才序を欠き、かつ元刊本の東湖精舎跋を持つ奇字閣写本(臺灣國家圖書館索書號 110.2 00982)を元刊本からの写本と推測した。しかし、奇字閣写本では「魚」が影宋写本の字形となっておらず、また、影宋写本の字形が後人の書写の中で発生したものの疑いが出た。

そこで、明清時代の写本からも篆文字形を採集して対比した。明代の復古編の重要な資料に、後に四庫全書の底本となった萬曆年間の黎民表本がある。黎民表本は影印出版が無いので、崇禎年間に黎民表本から写されたとされる馮舒跋本(北京國家圖書館所蔵 善本書號 3378)、また同じく黎民表本から写された四庫全書本と比較を行った。その結果、影宋写本・元刊本は誤っていないが、馮舒跋本・四庫全書が共通して誤っている特徴が奇字閣写本にも確認された。つまり、奇字閣写本は確かに元刊本の東湖精舎の跋文を含むが、字形に関しては明刊本の系列に近い。このことから、奇字閣写本の字形は元刊本が訛ったものではなく、さらに元刊本が大徐本に従うが影宋写本が従わない部分を全て後人の誤写と考える必要は無い。

4.2.2. 復古編の上正下譌と本編での準拠状況

復古編は附録として筆迹小異(同じ文字だが字形が若干異なるもの)、形相類(別字で字形が似ているもの)、上正下譌(字形差のために誤字であるもの)などが集められている。上正下譌の中には非常に微細な字形差を問題にするものがあり、本編はどの程度準拠しているかを確認し、伝抄の過程で混乱した可能性を検討した。

邱永祺 2011 では、大徐本と復古編の篆文の違いについて、大徐本以前の説文、金石資料、伝抄古文などの可能性を挙げている。王珏 2020 はこれらの附録に見える字形の多くが伝抄古文や金石資料に実際に見えるものであり、それらに対して字形の整理規準を示すために編まれた附録であると考えている。しかしながら、どのような場合に大徐本よりもそれらの資料に見える字形を優先するのかという網羅的な検討はされていない。王珏 2013 は「走」に関しては大徐本の六書に基づいて改めた可能性を指摘したが、その他の字形に関しては未検討である。

そこで、上正下譌の全項目(78 項)について大徐本の六書情報と突き合わせ、また改修した検索ツールにより、この正誤規準がどの程度本文で守られているかを調べた(図形部品はしばしば部首首字であり、単体としては従っていることが多いが、これを含む複合字は従っていない場合が少なくない)。

調査の結果、上正下譌が示す字形差のうち大徐本の六書情報に基づいて正誤を判定していると思われるものが 75 項、大徐本の六書情報で判断できないものが 2 項、注目する字形差が不明なものが 1 項となり、大半が大徐本の六書情報に基づくと考えて説明できることが分かった(鈴木 2021d)。特に多いのは篆文の中で用いられる矩形あるいは囲み線が口腔の「口」かどうかというもの(章・豆・京・舎・石・呉・堇・聿・足・邑・戰など)。しかし、「石」のように宋代の金石学資料で既に金文字形は口腔の「口」に従っているものでも、復古編は大徐本の六書に従い、口腔の「口」に作るものを誤りとする。

この正誤規準のうち、復古編本編が(影宋写本・元刊本とも)実際に準拠する一方、大徐本が従わない規準は 12 項あり、これらは復古編の独自の正誤規準が保存されたものと考えられる。これらの一部は元代の増補本である増修復古編および續復古編も準拠している。

王珏 2020 が指摘するように、「筆迹小異」が掲出する異体字には金石学の影響が考えられるが、「上正下譌」に見える正誤規準は金石学の知見を反映したものではなく、説文の、しかも大徐本の六書を基礎にしていることは注意しなければならない。従って、復古編本文の字形が大徐本と異なるとしても、それは大徐本以前の説文や金石学文献から持ち込まれたものとは考え難い。

4.3. 増修復古編・續復古編について

4.3.1. 増修復古編・續復古編の評価の再検討

復古編の元代の増補のうち現存しているものが増修復古編・續復古編の 2 書であるが、古典的には胡樸安 1937 の評価がひかれ、増修復古編の評価が低く、續復古編の評価が高い。この根拠を精査すると、増修復古編の評価は四庫全書提要により、續復古編の評価は續修四庫全書提要によるものであり、それらの著者は續復古編・増修復古編の対比を意図したものではなく、また共通の評価基準によるものではない。さらに、増修復古編の誤りとして批判されている部分を確認

すると、もともと廣韻の字積を引いていることがわかる。従って、説文に基づく文字学としては確かに問題があるのだが、その問題を呉均の責とする四庫全書提要の評価は適切でないことが分かった。一方、續復古編は經典に見える説文未収字を増補したことが評価されているが、この評価は續復古編に寄せられた曹本の友人からの評価を引いたものであり、実際に増補されている文字を数えると説文未収字はそれほど多くない。両書の特徴については再検討の必要がある。

4.3.2. 増復古編の版本調査

増復古編の通行の影印是北京図書館珍本叢刊で影印出版された汪啓淑旧蔵本であり、これは上巻のみで序文も欠いているため成書時期の特定が難しい。四庫全書提要では凡例で黄氏韻會(黄公紹の『古今韻會』)を引くことから元代成立と考え、この説が踏襲されてきた。しかし、北京図書館所蔵の同版本と見られる繆荃孫旧蔵本には趙撝謙と張美和の序文が含まれることが分かり、そこで参照されている書名から、この版は洪武年間以降の印行であることが分かった。また、この序文には重刊を思わせる文言が無いため、成書が明初という可能性も考えられる。復古編影宋写本に無く、元刊本に含まれる一字(站)が含まれることから、増復古編が参照した復古編は元刊本と推測される。従って、引いているものも古今韻會それ自身ではなく、その簡略版である『古今韻會舉要』の可能性もある。

増復古編は1737字のうち1021字が復古編と重なっており、また、著者に関しても張有を著者、呉均を増補と書いていることから、これを単体で用いることを想定したと思われる。復古編が大徐本と異なる正誤規準を持ち、実際に本文をそれに準拠させていた12項のうち、2項は大徐本の字形に改めていることから、増復古編は復古編の篆文字形を大徐本に近づけようとした可能性がある。

4.3.3. 續復古編の版本調査

續復古編は序文から元末の成書と考えられているが、その撰述が1332~1352年という長期にわたることが記されており、好古齋元刊本が印行される前に開始したが、成書は元刊本以降ということになる。續復古編は明清時代の写本と、清刊本しか残っていない。明清時代の写本の関係は朱生玉・胡惠 2020 が整理しているが、清刊本の元になったとされる陸心源旧蔵写本と、趙宦光旧蔵写本の関係の参照関係は明らかではない。

本課題で両書の対照表を作る過程で、趙宦光旧蔵本で見出し字篆文が欠けている部分が陸心源旧蔵本など清代写本では欠けていない部分が見つかり、その一方、陸心源旧蔵本をはじめ清代写本では附録において反切が欠けている部分が趙宦光旧蔵本では欠けていないことがわかり、この2つは直接の参照関係はなく、ある時点で分岐したものであることが分かった。

4.4. その他の成果

宋代の著録に見える青銅器の大半は器物としては失われており、殷周金文集成でも拓本ではなく著録の模写・模刻を採録している。しかし、山本 2022 で議論したように既知の銘文から青銅器が偽造されうる。本課題では、類似の銘文を持つ現存の青銅器と、宋代の著録に見える青銅器を単純に対比して伝抄の過程での字形の変化を判断することは避けた。また、同一の器物であっても著録によって大幅に字形が異なり、伝抄の過程で分岐したと言うよりも、不鮮明な拓本をどのように模写するかという段階で分岐した可能性が疑われるものも見つかった。

復古編の上正下譌に関する調査の過程で、南宋刊元修本説文解字(海源閣本)と南宋刊説文解字五音韻譜の字形の揺れに符合している箇所がしばしばあることが分かった(鈴木 2021a)。この2つは行款が全く異なるが、祖本を共有している可能性が見つかった。

参考文献

先行研究

- 胡樸安 1937 『中国文字學史』, 商務印書館, 1937
- 邱永祺 2011 『張有《復古編》総合研究』, 臺北市立教育大學碩士論文
- 王珏 2013 「宋代《復古編》“規範”小篆字形“走”对元明清篆書的影響」, 文化學刊, 2013(06), pp.159-163
- 王珏 2020 『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, ISBN 9787520372626
- 朱生玉・胡惠 2020 「曹本《續復古編》概説」, 寧波大學學報(人文科學版), Vol. 33, No. 2, pp.94-99

本研究結果(上記概要で明示的に参照したもの)

- 鈴木俊哉 2019, 四庫全書本『繫傳』の調査・文淵閣本と文津閣本, 広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究, 14(2019), pp.79-99, doi 10.15027/48894
- 鈴木俊哉 2021a, 小篆の図形部品の不統一性から見る字書資料の参照関係, 情処研報 2021-CH-127, No.3, pp.1-5
- 鈴木俊哉 2021b, 北宋『復古編』の元代の増補2種の文字集合の違いについて, 情処研報 2021-DC-121, No.6, pp.1-6
- 鈴木俊哉 2021c, 説文小篆字形差確認のためのツール試作と復古編の上正下譌の調査, じんもんこんシンポジウム 2021 論文集, pp.218-225
- 鈴木俊哉 2021d, 復古編の上正下譌における正誤規準と元代の増補版での準拠状況, 総合科学研究, 2(2021), pp.53-82, doi 10.15027/52025
- 山本堯 2022, 殷周金文辨偽新考, 中国出土資料研究, 26 卷(2022), 印刷中

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 2
2. 論文標題 復古編の上正下調における正誤規準と元代の増補版での準拠状況	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合科学研究	6. 最初と最後の頁 53-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/52025	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本堯	4. 巻 26
2. 論文標題 殷周金文辨偽新考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国出土資料研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 2021
2. 論文標題 説文小篆字形差確認のためのツール試作と復古編の上正下調の調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 じんもんこんシンポジウム2021論文集	6. 最初と最後の頁 218-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 2021-CH-126, No.8
2. 論文標題 原本玉篇の江戸期写本 - 巻19の錯簡について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情処研報	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 2021-DC-121, No.6
2. 論文標題 北宋『復古編』の元代の増補2種の文字集合の違いについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情処研報	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 2021-CH-127, No.3
2. 論文標題 小篆の図形部品の不統一性から見る字書資料の参照関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情処研報	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉, 浜田秀, 大居司	4. 巻 1
2. 論文標題 原本玉篇の江戸期写本群 : 巻19水部について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合科学研究	6. 最初と最後の頁 59-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50558	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉, 塚田雅樹	4. 巻 2021-DC-120(13)
2. 論文標題 五音韻譜の小篆字形のデータベース化とISO/IEC 10646小篆提案への適用分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情報処理学会研究報告(DC)	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉, 塚田雅樹	4. 巻 2020-DC-117(3)
2. 論文標題 ISO/IEC 10646に提案された小篆フォントの字形について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 情報処理学会研究報告(DC)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木俊哉	4. 巻 14
2. 論文標題 四庫全書本『ケイ傳』の調査・文淵閣本と文津閣本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究	6. 最初と最後の頁 79-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/48894	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木俊哉
2. 発表標題 四庫全書における説文の書写方針の異なり 大徐本と小徐本
3. 学会等名 東洋学へのコンピュータ利用 第32回研究セミナー(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1) ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N5133 https://www.unicode.org/wg2/docs/n5133_SealGlyphsToBeDiscussed.pdf
(2) 京都大学人文科学研究所蔵 説文解字十五卷 椒華吟舫本 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A038menu.html
(3) 京都大学人文科学研究所蔵 説文解字繫傳 祁氏翻刻後印本 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A039menu.html
(4) 京都大学人文科学研究所蔵 説文解字繫傳 祁氏翻刻初印丙種本 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A047menu.html
(5) 京都大学文学研究科蔵 説文解字繫傳 40巻 祁氏翻刻初印甲種本 https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00031845
(6) 汲古閣説文解字と派生諸文献小篆対照表 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048726
(7) 復古編諸版小篆字形対照表 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052379
(8) 復古編・續復古編小篆字形対照表 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052380
(9) 復古編・増修復古編小篆字形対照表 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052381
(10) 考古圖釋文模写字形一覧 https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052382
(11) 李陽冰『篆書千字文』小篆 https://gitlab.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/-/tree/qzw/img-QZW-QGZ
(12) 『復古編』影写本小篆

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山本 堯 (Yamamoto Takashi) (90821108)	公益財団法人泉屋博古館・学芸課(本館)・学芸員 (84310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関